

サンクト・ペテルブルグ通信

「手づくりのロシア旅行」記 2002年8月20～27日

今回の旅行企画は日本ユーラシア協会京都府連としてはしばらくぶりの企画。団長は長砂実関西大学教授（府連会長）。旅行企画はユーラスツアーズ、添乗員は金森女史。総勢20名。8月20日から27日で、サンクト・ペテルブルグで5泊という「ゆったりコース」。(費用は278000円) 関西空港～タシケント(ウズベキスタン)～サンクト・ペテルブルグ～モスクワ～タシケント～関西空港。

第一部 エルミタージュ美術館



エルミタージュの美術品

20日の夜中にサンクト・ペテルブルグのプルコヴォ空港に到着。ホテル・モスクワへ。21日、午前10時ホテル出発、エルミタージュへ！今日は終日エルミタージュ美術館。食事をはさんで夕方5時までかかって、1150室の中で、90室を見ただけ。それでも展示室は美術品の宝庫！「京都でエルミタージュ美術展とかあったがあれはこの1部屋分しか持ちだされていなかったのではないか」と言いたくなるくらい！現地ロシア人のガイド（兼通訳）さんに聞いたら「研究員はフランス美術関係だけで80人です。その他にもエジプトアジアなど総勢はもっと多いです」。「京都市美術館の学芸員はたったの5人、しかも研究職の待遇は受けていませんよ」というとガイドさんは「えっ！」と答えなし。

「エルミタージュの緞帳」(NHK出版 小林和男著)の中からの話題。

ソ連軍は第二次大戦の末期、美術専門家、秘密警察、そして軍人兵士からなる特殊部隊で、ベルリンを初め各地の美術館、コレクションに狙いを付け、作品を持ち帰った。

1995年はそうした戦利品である美術品が、ロシア各地の美術館でいっせいに公開され始めた年だった。そのなかでも私が度胆を抜かれたのが、4月からサンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館で公開されたフランス印象派の作品74点だった。この特別展にエルミタージュ美術館

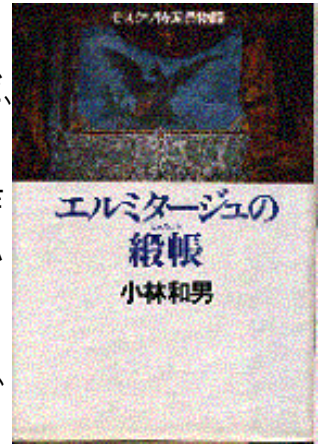
は「隠されていた傑作展」と名づけた。

ドガの油彩「コンコルド広場」、ゴッホの「白い家」、ゴッガン「姉妹」など、戦前その存在が知られていたものの、戦後は行方がわからず、おそらく焼失してしまったものと専門家が推定していた作品もあった。セザンヌの大作「庭にて」はセザンヌ自身と夫人をモデルにしたもので、まるで今アトリエから持ち出されたかのように鮮やかな色の艶を保っていた。

1945年、美術品を持ち帰るために編成されたソ連の特殊チームが襲い、すべての作品を列車でソ連に運び去り、以来陽の目を見ないままエルミタージュの奥深くしまいこまれていた。

エルミタージュ美術館のピオトロフスキー館長は、開会式で「人類の宝が人の目に触れないのはいかにも残念だ。人類共通の傑作を見てもらうために展示を決心した」と挨拶したが、実際に公開の決意をしたのはゴルバチョフの登場による改革の結果ではなく彼に対するクーデターが失敗に終わってエリツィンの手によって秘密警察の解体が決定されてからだったという。戦利品の所有権に問題を残していることは認めている。

開会式に出席したドイツのサンクトペテルブルグ駐在総領事も、「公開には賛成するが、ロシアの所有権に同意してはいない」と釘を刺した。この展覧会をきっかけに、ロシア各地ではいろいろな戦利品の展覧会が開催されるようになった。それを見てその所有者の子孫などら返還の要求も出ている。しかしそれに対してロシアは、「ナチスドイツはイコンを初めロシアの貴重な美術文化遺産を持ち去った。それを返すならこちらも返していい」といっている。しかし、ナチスドイツが持ち去った文化遺産は、戦後その多くが散逸して、まとめて保管されてはいない。



「エルミタージュ 波乱と変動の歴史」(郡司良夫・藤野幸雄共著 勉誠出版) を読んでみるとエルミタージュを現在のような総合博物館としてほぼ完成させたのはロマノフ王朝の絶頂期を築いたドイツ出身の女帝エカテリーナ2世だ。

彼女はロシア皇帝に嫁ぐが、夫ピョートル3世は戦争に没頭する残忍な性格。愛人を持つ夫を嫌った彼女は読書に没頭する毎日で、その中心はフランスとイギリスの道徳、自然科学、宗教など広範にわたり、フランスの「百科全書」は手放したことがなかったという。

ついに愛人であり近衛部隊士官グリゴリー・オルローフらとともに、

夫に対しクーデターを起こし、自ら女帝に即位。1762年彼女が即位した年、「冬宮」がサンクトペテルブルクに完成。エカテリーナはこの荘厳な宮殿に小さな「離れ」の増設を指示。これが「隠れ家(ルビ=エルミタージュ)」現在の小エルミタージュ。小エルミタージュ完成後、エカテリーナは、施設内に西洋絵画を飾り、この「隠れ家」を愛したと言われる。

彼女はフランスから美術品をどのようにして買い入れたか? その代理人を務めたのはヴォルテール、モンテスキューらとともにフランス改革派の中心人物、ディドロであったといわれている。実際、デカプリスト広場(元老院広場)の巨大な「青銅の騎士像」(ピョートル1



世像)はディドロの推薦した彫刻家ファルコネによって建てられたものである。

現在のエルミタージュ美術館は、女帝エリザベータの「冬宮」として建築を開始、8年をかけて完成させた大宮殿。その他、エカテリーナが増設した「大エルミタージュ」や、一般に公開される美術館として1851年に建設された「新エルミタージュ」など5つの建物を総称してエルミタージュ美術館が成り立っている。

美術館内の収蔵点数は実に270万点余。巨大迷路のような美術館内の収蔵品は西洋のもの以外にも古代スキタイ文化の発掘品やシルクロードの美術品などもある。

エルミタージュの貴重な「財産」はスターリンの時代に内戦と外国からの干渉戦争による「国家の財政上の理由」から相当数が売却されている。解説ガイドさんの話でも「この部屋の天井まで届く太い柱はすべて純金でできていましたが、ヴォリシェビキによって取り払われ、現在の物はメッキです」ということであった。勿論館長はじめ職員一同が何とかしてモスクワからの「資金調達」命令に抵抗して売却に抵抗を続けたことはいうまでもない。

1941年6月から開始されたナチスドイツの侵攻に対して、エルミタージュでは館長の指揮により「大疎開作戦」が展開される。行き先はウラル山脈のスヴェルドロフスク(現エカテリンブルグ)。1945年5月9日ドイツ降伏後のドイツ支配下で収集されていた美術品やコレクションなどは上記の「エルミタージュの緞帳」にあるとおり。しかもソ連が占領したベルリン(後に米英との分割支配)にこうした「遺産」が集積されていたというから、ソ連への「搬出」は想像を絶する規模だった(らしい)いまだに未解明の部分があるという。

エルミタージュ劇場



23日、今晚はエルミタージュ劇場の「白鳥の湖」を予約しているので、早々に夕食を終わり、タクシーでエルミタージュへ。エルミタージュ劇場に到着。美術館の東の棟の入り口は「えっこんなところにホールが?」というドアが。階段をのぼって3階へ、ロビーをぬけて入ると階段状になったホールは約

300席。正面には「双頭の鷲の緞帳」。「白鳥の湖」は「さすがソ連時代からのロシアバレエ」と納得。(ある人に言わせると、「芸術と軍事という儲からないところに資金をつぎ込んだのが社会主義権力の功罪」とか。)

これも「エルミタージュの緞帳」で小林和男氏が書いている話題。

1994年の10月、私はエルミタージュ美術館を訪れ、ピオトロフスキー館長に会った。NHKの新年番組に出演を承諾したロストロポーヴィツチの演奏会場として、エルミタージュが最もふさわしいと考え、その許しを得るためだった。私は演奏場所としてエルミタージュの入口にある「外交官の階段」と呼ばれる一角を考えていたのだが、館長は演春場所としてまたとない場所があるという。

彼の案内で厳重な扉を開け、入ったところがエルミタージュの劇場だった。エルミタージュ美術館にこの

劇場があることはあまり知られていない。エルミタージュを紹介する写真集にもこの劇場は載っておらず、ロシアの相当なインテリでもこの劇場の存在を知っている者はいなかった。皇帝一家の劇場として一八世紀の末につくられたこの劇場は、客席は300ほどで円柱に囲まれ、観客が互いに視線を交わせるような設計になっている。

館長に案内され、劇場に入り、シャンデリアの明かりが点いたとき、私はあっと驚いた。正面の舞台に下がっている緞帳は、金色の王冠を戴いた「双頭の鷲」が客席をにらんでいる図だ。双頭の鷲は革命政権が倒したロマノフ家の紋章である。いったい憎き敵の紋入り緞帳が革命政権のもとでどう生き延びてきたのか、私の驚きはそこにあった。

私が驚くのをみてピオトロフスキー館長はいたく喜んでくれた「よくぞ気がついてくれた」というのだ。旧暦1917年10月2日、新暦の11月7日夜、革命が成立する。300年続いたロマノフ王朝に代わって、労働者農民の天下となる。革命政権は皇帝の威光が残るものはすべて抹殺してしまいたかっただろう。なのに、なぜこの目の前に、威風堂々と王冠を戴いた「双頭の鷲」が生き延びているのか。劇場が考え出したのは、緞帳の表面に薄い幕を張り、その上に別の模様を描き出すことだったという。基調になっているデザインはそのまま生かし、王冠を戴いた双頭の鷲の部分は、雲がかかったように見える薄い布がかけられていた。以来70年あまり、緞帳は破壊されることもなく、劇場に飾られ続けた。

第二部 芸術の都散策

芸術家たちの墓標

23日、朝9時集合でホテル向かいのアレクサンドル・ネフスキー修道院に向かう。午前9時30分開場で「芸術家たちの墓地」に入る。チャイコフスキー、リムスキー・コルサコフ、ドストエフスキー、ムソルグスキーなど芸術家の墓が一団をなしている。



グリンカ



チャイコフスキー



ストラビンスキー



ドストエフスキー



ルービンシュタイン

「罪と罰」の街並みを歩く

24日は午前中、ドストエフスキーの「罪と罰」の現地（小説の書かれた当時のままの町並み）を散策する。残念ながらラスコ リニコフの住んでいたアパート（13階の屋根裏部屋）は改修中とのことで中に入れず。ソーニャの住んでいたアパートや事件のおきた金貸し婆さんのアパートをたずねる。現在のアパートの住人は土曜日の朝から集団で何事か、という顔をしながら不思議そうに異邦人たちを注目。その後ドストエフスキー記念館をたずねる。

文学者のカフェで昼食。すばらしい女性ヴォーカリストの出演で盛り上がったところで、次はネヴァ河と運河のクルーズ。船からみるエルミタージュやペトロパブロフスク要塞などは格別。



ドストエフスキー記念館



文学者のカフェ



第三部 ロマノフ王朝の宮殿や寺院 ロシア皇帝 ロマノフ家

1613-45	ミハイル・ロマノフ	1741 - 62	エリザヴェータ・ペトロヴナ
1645-76	アレクセイ・ミハイロヴィチ	1762	ピョートル3世
1676-82	フョードル・アレクセエヴィチ	1762-96	エカテリーナ2世(女帝)
1682-89	イヴァン5世	1796-1801	パーヴェル1世
1682 - 89	ピョートル1世	1801 - 25	アレクサンドル1世
1689-1725	ピョートル1世(大帝)	1825-55	ニコライ1世
1725-27	エカテリーナ1世	1855 - 81	アレクサンドル2世
1727-30	ピョートル2世	1881-94	アレクサンドル3世
1730-40	アンナ・イヴァノヴナ(女帝)	1894 - 1917	ニコライ2世
1740 - 41	イヴァン6世		

夏の宮殿 (ペテルゴフ)

ピョートル1世(大帝)によってフィンランド湾の岸边につくられた「夏の宮殿」までは、ネヴァ川埠頭から高速水中翼船で。噴水と滝、宮殿はすばらしい。



エカテリーナ宮殿(ツァールスコエ・セロー)

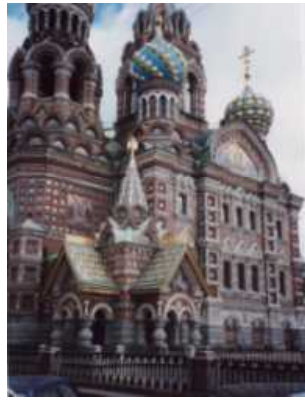
ツァールスコエ・セローとは「皇帝の村」。第二次大戦の時、ドイツ軍の侵攻により、宮殿は破壊されたが、復元した。絵画や焼物などは土中に埋めて守られたという。



イサーク寺院



血の上の教会



イサーク寺院は、聖イサーク・ダルマツキーを記念して名づけられ、5月30日がこの聖人の祝日とれている。この日はちょうどペテルブルグの創始者、ピョートル大帝の誕生日でもったから、ロシア帝国の首都の幾つかの広場のうち、イサーク広場は国の中心の寺院として受け止められていた。

グリボエドフ運河の岸に建てられている血の上の教会。この場柄で1881年3月1日、テロリストの爆弾によって、農奴制を廃止した「解放皇帝」という異名を持つ皇帝アレクサンドル 世は致命的な傷を負い、同日冬宮で死去。皇帝の26年間の治世の記念と皇帝殺害の贖罪のしるしとして民衆の献金で建てられた聖堂は、《スパス・ナ・クラヴィ》(血の上の救世主)という独特な俗称をつけられている。

第四部 ロシア革命の跡を訪ねて

ロシア革命略年表

1917年3月8日、首都ペトログラードで約8万人の労働者がストライキ、「パンをよこせ」・「戦争反対」を掲げて大規模なデモ。

10日にはストライキに参加する労働者の数は20万人に。

12日には、首都の軍隊の多くが革命側につき、わずか一週間で首都は完全に労働者と反乱軍によって占拠された。皇帝ニコライ2世は15日に退位、弟のミハイルに譲位。

16日ミハイルは辞退し、ロマノフ王朝は崩壊。これが三月革命。

三月革命によって、リヴォフ公を首相を中心とする臨時政府が樹立された。

臨時政府にはソヴィエトからはケレンスキーだけが入閣(法相)。

以後、臨時政府とソヴィエトという、いわゆる「二重権力」状態が続く中で臨時政府は戦争を継続。

4月16日、レーニンが封印列車で帰国、ただちに「四月テーゼ」を発表。

「全ての権力をソヴィエトへ」をスローガンに。

7月16~17日、ペトログラードで約40万人の労働者・兵士が「全ての権力をソヴィエトへ」をスローガンに掲げて武装デモを行ったが鎮圧された

(七月事件)。政府はこの出来事を口実にボリシェヴィキを弾圧し、レーニンは再び亡命。

7月21日に社会革命党のケレンスキーが首相に。ケレンスキー政権はボリシェヴィキを弾圧

9月にコルニーロフのクーデター。反乱鎮圧に大きな役割を果たしたボリシェヴィキがソヴィエト内でも多数派に。

10月20日、フィンランドに亡命していたレーニンがペトログラードに戻り、23日に開かれ

た党中央委員会ではレーニンの主張する武装蜂起の方針が決定された。

26日にはペトログラード＝ソヴィエト内に軍事革命委員会が組織され、11月6日早朝、ケレンスキーは軍事革命委員会の委員の逮捕を命じ、ボリシェヴィキの機関誌発行所を襲撃。ボリシェヴィキは武装蜂起し、この日の夜半までに駅・郵便局・電信局・国立銀行など首都の主要な拠点をほとんど占拠。

1917年11月7日午前10時、ペトログラード＝ソヴィエト軍事革命委員会は権力を掌握。同日午後9時、臨時政府の閣僚たちがこもる冬宮への攻撃が始まり、8日の午前2時にこれを占領、ケレンスキーを除く全閣僚が逮捕された。

冬宮（エルミタージュ）を攻撃する砲声がとどろく中で、深夜からスモーリヌィ女子学院で開かれた第2回ソヴィエト大会でソヴィエトによる政権掌握を確認、レーニンを議長とする人民委員会議を創設。第2回全ロシア＝ソヴィエト大会が開かれた。

メンシェヴィキと社会革命党が武装蜂起を非難して退場する中で、新政権の成立が宣言され、「平和に関する布告」・「土地に関する布告」が採択された。

そして人民委員会議（ソヴィエト政府）の議長（首相）にレーニンが、外務委員（外務大臣）にトロツキーが選出された。これが十一月革命。

スモールヌィ修道院

オーロラ号



22日はロシア革命の跡を訪ねる日程。まずレーニンの革命本部の置かれたスモーリヌィ修道院。さすがにレーニンの像は破壊されず、建物はペテルブルグ300年記念とかで庭を改修中。次は巡洋艦オーロラ号、日本海海戦にも参加したという古強者。1917年10月25日のボリシェビキの革命の「号砲」を鳴らしたことにより一気に権力の崩壊と移行が成功した、と言われているが、実際はすでに権力はボリシェビキの手中にあり、号砲は空砲であったとか。このあたりの解説は上島武先生にいただいた。

フィンランド駅

急遽、フィンランド駅にバスをまわして下車、駅構内を一瞥してバスに帰っていたら金森さんが「山本さんはどこ？」と探しに帰ってきた。「山本さん、この駅にレーニンの封印列車が残されているんですよ」と手を引くようにして案内をしてくれ、改札口を「×××」とかいいながらすり抜けて駅舎に入って「これがそうです。写真を取りましょう」とシャッターをおしてくれた。

「封印列車」ポリシェヴィキの指導者レーニンは三月革命が起こったときにはスイスに亡命していた。革命の勃発を知ったレーニンはすぐに帰国しようとしたが、第一次世界大戦中で交戦国を通過しないと帰国できないため、ドイツの提供した「封印列車」で帰国した。ドイツは革命家をロシアに送り返すことによりロシアに革命が広がることを期待したが、彼らがドイツを通過するときに革命を宣伝することを恐れ、外部との接触を一切禁止する「封印列車」でレーニンらをロシアに運んだ。

第五部 レニングラード900日の包囲から勝利へ

24日、今回の企画で出発前にはなかった「第2次大戦・レニングラード900日の攻防」の跡をつけ加えてもらうことができ、郊外のピスカリョフ墓地を訪れることになった。夕方でもあり土曜日だったので残念ながら花を捧げることはできなかったが、燃えつづける「永遠の火」に気持ちだけは献花、両側にある記念館はやっと片方だけ入館できたが、あまりにも生々しい写真に胸をうたれる。

1939年8月23日に調印された独ソ不侵略条約にはポーランドの分割支配という秘密協定が付随しており、それによってドイツ軍は9月1日ポーランドに侵入。世界大戦に突入した。1941年6月、独・伊はソ連に宣戦。当時のナチス・ドイツ、ヒットラーの電撃作戦（バルバロッサ作戦）の前に対独防衛線を構築することが出来ず、ただただ後退と敗走を続けたソ連軍。その中で1941年9月4日から1944年1月27日までの900日のレニングラードはドイツ軍に包囲され激しい攻防戦となった。

兵士20万人を含む200万人の中で60万人もの餓死と戦死者をだしながら、ついにソ連軍の反撃の中で解放をかちとった偉大なレニングラード市民に心をよせる。



写真はピスカリョフ墓地。すぐ後は燃え続ける「永遠の火」、遙か後方は慰霊の像。左側が兵士の墓標、右側が市民の墓標。

このあたりの歴史的経過についてバスの中で長砂先生から解説があった。産経新聞社刊の「スターリン秘録」はソ連崩壊後、公開された秘密文書の山を読み解き、くわしく史実を解き明かした本だが、その他、エレンステンの「スターリン現象の歴史」や、メドヴェージェフの「共産主義とは何か」(上下)などにもくわしい。当時スターリンはヒットラーが英仏の占領をねらうとみて楽観。ポーランド分割の秘密協定もあり、ヒットラーを信頼しきっていた、というのは事実だったようだ。その上1930年代の大粛清により赤軍の有能な幹部将

校はほとんどがいなかったため、本格的な反撃を組織できず、ドイツ軍の侵攻の前にスターリンは絶望の淵にあったというのが真相らしい。党の指導部がひきこもっていたスターリンに、反撃の指揮を直訴しにおしかけると部屋にいたスターリンは自分が「粛清される」と勘違いして青ざめた、というのは事実だったようだ。

ヒトラーが「なぜレニングラードへの攻撃命令をださず、迂回作戦をとり長期包囲作戦を採用したのか」という謎ははまだ解かれていない。やがてスターリングラードの敗北、モスクワ作戦の挫折からドイツの撤退・敗走が始まるが、こうした戦局の展開はドイツ軍情報将校であったパウル・カレルの「独ソ戦史焦土作戦」¹⁾、「バルバロッサ作戦」(各上、中、下 学研M文庫)などに詳しい。



第六部 旅行の思い出

機長からのプレゼント

20日、関西空港に予定通り午前8時までに全員集合。合計20名。(添乗員の金森さん含む)。搭乗手続き一切を終えていよいよウズベキスタン航空機(エアバス300)に搭乗。タシケントまでの所要時間は8時間。途中眼下にヒマラヤのすばらしい眺め。残念ながら飛行機の二重窓からはいい写真は撮れず。

到着したのはウズベキスタンのタシケント国際空港。ところが...空港待合室は冷房なし(わずかにあったのかもしれないが) すし詰状態で4時間も!?という時に二階のレストランが使える、ということでビールとジュースで20名がうんざりしながら雑談。

その時、金森さんが「今日は誕生日の人がいます。ウズベキスタン航空機の機長さんをお願いしてメッセージカードをいただいています。山本さんです」と紹介。

56歳の誕生日を一同に祝っていただいた。機長の似顔絵の入ったはがきのバースデーカードのロシア語は「誕生日おめでとう。これからの御多幸を」といったことらしい。(右の写真)

みんな「まずは乾杯!」ということで、暑さも息苦しさも一時解消。

ところが、タシケントからS.T.ペテルブルグまでの航空機はロシアのイリュ シン62型



機。両側3席づつの狭い通路。まず冷房がきかない。「高空にのぼれば周りはマイナス30度だからきっと涼しくなりますよ」といっていたらそのとおり。周りはアラブ系の若者が通路にたむろし若い女性もまじってうるさいこと、ウィスキーを持ちこみ、「氷！コーラ、ジュース」と最後までワイワイ。通路脇のシートはこわれていて飛行中に懸命に修理。

飛ぶこと5時間、ST .ペテルブルグのプルコヴォ空港に夜11時前に到着。それから入国手続きに1時間あまり。迎いのバスにゆられてモスクワホテルまで深夜の道を。みんなぐったり。日本時間午前5時。自宅出発の午前5時50分から結局24時間の旅。部屋に入ってバー買ったビールを飲んでそのままダウン！

忘れ物と必需品

到着の翌日からモスクワホテルで5連泊。昼食はでかけた先のレストランで取ることになっているので、ロシア料理のフルコース。早速ひろいホテルのレストラン（夜はショーの会場にもなるらしい）。バイキング方式ですきなメニューを選んで食べればいいというのだが... サラダにしてもケーキのような（パンのような）ものにしても、ソースがどれかわからない（なにしろロシア語表記）。適当に取り合わせて味見しながら、ということになったが、そこで「しまった。醤油を忘れた」ということに気が付いた。どこまで行っても日本人は日本人。

翌日の夜のこと、気温は17 から20 くらいとさわやか。そこで窓を開けて寝ることにすると、やがて蚊がどこからともなくプーン。これには参った。聞いてみると何人かの人「襲撃」を受けた様子。次の夜は窓を閉めたがダメだった。どうやら窓の下部に通風孔があるらしい。蚊取り線香をもってくるのを忘れた。

さて出発前にAPSカメラの方が小型でよかろうとフィルムを40枚撮りを4本用意していったが、初日エルミタージュと二日目ではほぼ使い果たしてしまった。同行のKさんも「売店にはAPSのフィルムは売っていない」ということで、さて、どこで売っているか？日程は基本的に夕方5時過ぎにホテルに帰った後はオプションの劇場でのバレエ鑑賞などだから行かない人は自由。出発前は「くれぐれも一人歩きなどはしないように」という「お達し」であったが、どうやら大丈夫な様子。

そこでお許しを得て一人で街へ。ホテルの前は有名なネフスキー大通りだから、中央部にむかってどんどんと歩く。途中のカメラ屋さんによったところ、「あった！」隅っこにAPSフィルムが。しかし40枚撮りが2本と25枚撮りが2本しか店にはないという。まだ35ミリ標準カメラだけらしい。勿論デジカメはなし。というよりパソコンがまだ普及してないようだった。広告もなかったし雑誌の広告にもパソコンはなかった。

インターネット体験

手持ちのノートパソコン（Victor インターリンク）と電圧変換機（220v 100v）を持っていったのだが、室内からの電話では交換機からしか国際電話接続はしてもらえないということが



わかり接続は断念。ところが夕方街を歩いていると、ビルの入り口の奥にロシア語で「インターネットセンター」というネオンがあるではないか。勇気をふるってドアを開くと、中には少し旧式のパソコンが数十台、若者たちが熱心に画面に向かっている。英語で「I want use Internet」というと「Number 11」。そこで11番のテーブルにいて「How much?」とたずねると「10 Minutes Free」。10分間は無料ということらしい。

早速インターネット接続で自分のホームページを開き「This is My Homepage」といって受付のお兄さんに見せると「オー!」とおどろきの声。あっという間に10分で画面はダウン。そこで交渉して30分有料で延長してもらった。(45ルーブル)次の日も、次の日も通って日本と京都のニュース(高校野球で明徳義塾が優勝した、とか)にアクセス。

モスクワのホテルで

いよいよサンクト・ペテルブルグ最後の日程を終えて、プルコボ空港からモスクワへ向う。約1時間。シェレメチェボ空港に到着。モスクワの案内はナターリアさん。空港からモスクワ市内への道路を走りながら「アレッ、ST・ペテルブルグとはかなり雰囲気がちがう」と感じた。第一、走っている車がちがう。トロリーバスをはじめ、自家用車もみな洗車されて、新しい。少なくともST・ペテルブルグでみた「今にもドアやバンパーが外れそう」といった車など見かけないし、フロントガラスにひびの入ったタクシーなど見かけない。市街地に入ると広告塔もカラーディスプレイのものが設置されていたり、車窓からの観察だけでも「現代的な街」の息吹を感じ取れた。ナターリアさんに言わせると「ペレストロイカ以降、大きく変わったが、今のモスクワ市長はよくやっている」と評価する。

宿のロシアホテルはクレムリンのすぐ東側。ところがチェックインで問題がおきた。4階、5階、6階(私だけ)ということになったが、4階にエレベーターが止まらない、という。何かスポーツ関係の行事でかなりホテル側は4階の警戒に神経をとがらせているとのことで、とにかく4階の客は5階から階段で4階まで下りろ、とのこと。

次にフロントでもめていたのは、私(山本)と添乗員の金森さんが「同室」となっており、いくら説明しても相手側が間違いを認めようとしなかったことらしい。金森さんがロシア語で「対決」している合間、「このバカッ。大学くらい出てるでしょうが」と日本語でフロントの受け付け係りの青年にはき捨てるように。しかし相手は動じない(通じない)。そんなわけで私だけが6階に。別に高級な部屋ではなかったようだ。というわけで夕食が終わったのが10時、明日は早いので外出もならず。おとなしく寝るとするか。



クレムリンの城壁

金森さんからのプレゼント

最終日のモスクワ市内観光はまず「赤の広場」から。市内各所を大急ぎで回る。モスクワは次回にゆっくりの行程を計画することに期待しよう。

空港へのバスの中で金森さんが「ほんの少しですけど」といってわたされた包みをあけてみるとなんとおにぎりが2個。ホテルの湯沸しで3回もお米を炊き上げてのことだったとか。まさかロシア旅行でおにぎりが食べられるとは思ってもしなかったので大喜び。

旅のお土産

ロシアのお土産といったら何はともあれマトリョーシカ人形。私が買ったのはオーロラ号の岸辺のみやげ物屋。

「15 piece How much?」という「これこれ」といいながらその場で15個の豆粒ほどにいたる人形を並べて「どうだ、ほんとに15個あるだろう」といったかいわなかったか。とにかくホテルの売店の1/3の値段だった。



モスクワのみやげ物店（かなり高級）で見つけたのがエルミタージュ美術館の図録。エルミタージュの館内では見かけなかった貴重な日本語版の大判500頁のオールカラー図録が見つかった。手持ちがなかったのでTさんに借りて手に入れた。インターネットで調べたら英語版が30000円と出ていた。

楽しい思いでを胸に、モスクワ・シェレメチェボ空港へ。帰路の航空機はボーイング757機でタシケントまで。快適で来たときとは大違い。

27日午前8時過ぎ、無事帰国。 <完>